

照応現象としてみた逆接

— 「しかし」の用法を中心に —

加 藤 重 広*

《キーワード：逆接，接続詞，「しかし」，談話標識，知識管理》

0. 本稿の関心

一般に、「しかし」や「でも」や「だが」などの接続詞は，《逆接》の接続詞であると説明される。また，節と節の接続に関わる助詞類も，その意味用法について，やはり，《逆接》などの用語が用いられることがある。この場合，《逆接》は，《順接》と対をなす概念として用いられるのが普通であるが，あえて，これらの用語を用いずに説明することも少なくない。

- 1) 春になった。しかし，まだ寒い。
- 2) 姉は成績優秀だ。しかし，僕はそれほど優等生ではない。
- 3) 圭介はよく欠席する。しかし，浩志は毎回出席している。

この種の「しかし」の用法は，《逆接》と扱われるのが普通であるが，論理関係上ははたして同一だろうか。また，逆接と言われる用法として記述することが，合理的なのだろうか。本稿では，《逆接》がいかなる概念として定義されているか，また，《逆接》を以て「しかし」のごとき接続詞のたぐいを記述し，分析することが妥当なのか，さらに，妥当でないとするれば，どのように記述し，分析して行くべきなのか，について順次検討していくこととする。

接続が，先行する節や文の内容と後続の節や文の内容を関係づける機能を有しているのであれば，これは統語論で扱いうるものではなく，語用論的な分析を必要とするものであることは十分考えられる。統語論は文の内部要素の関連を扱うものであるが，語用論は文以上の単位と文以上の単位との関連を扱うものであり，接続詞が intra-sentential な要素ではなく，inter-

*katoh@hmt.toyama-u.ac.jp

sentential な、あるいは inter-textual な要素である以上、接続という現象は、語用論的な観点から分析することで初めて有効な分析となると考えるべきである。これまでは、文章論の観点や文章読解という観点から、接続のあり方を考えるものが中心で、そのなかでは、文よりも大きい単位（段落など）同士、あるいは一文と文より大きい単位の接続があることが指摘されている¹。しかし、これらはいくまで書かれた文章の分析であり、複数の言語使用者がかかわる会話での用法にそのまま適用できるものではない。

さらに、一見すると「接続していない」と思われるような用法も存在する。

4) 【窓の外を見ながら、独白的に言う】

「しかし、すごい雨だなあ。」²

この種の用例については、当然のことながら、《逆接》という分析が単純に妥当しない場合があり得るが、それだけでなく、「しかし」が《接続》の機能を有していると見るべきなのか、そうでないのかについても分析を要する。あわせて、この種の用法をどう扱うかについて、検討し、その用法について、語用論的に分析すべきものであることも主張する。

1. 先行研究瞥見

日本語において、専ら接続の機能を果たすものは、接続詞と接続助詞に分類されるものであるが、このほかに、いくつかの単語からなる慣用的な句が接続詞に相当する機能を持つこともある³。

1.1. 品詞分類上の扱い

日本語の研究において、接続詞は重要な位置をしめてきたとは言い難い。品詞論では、接続詞が副詞と非常に近い関係にあることから、接続詞という品詞範疇を置かず、接続副詞として副詞の一種として扱うという立場も多く見られる。接続詞という品詞を設定すること自体は、すでに大槻文彦の『広日本文典』など⁴に見いだされ、橋本進吉⁵もまた接続詞を一品詞とし

¹ 佐治圭三 (1987), 多門靖容 (1992), 坪本篤朗 (1998)などを参照。

² 本稿では発話状況を説明するため、【 】を用いる。以下の例文でも同様。

³ この種の句は、接続詞相当句などと呼ばれる (益岡・田窪 (1992²:57f))。「とは言っても」「それに反して」など、様々なものが考えられる。

⁴ たとえば、『言海』の冒頭に付された「語法指南 (日本文典摘録)」では、それまで助詞 (同書では「天爾遠波」と扱われることが多かったものを区別して別途「接続詞」という品詞を立てた旨注記してある。(大槻文彦 (1889:48f))。

⁵ 橋本進吉 (1935) では、副詞は用言・体言と明確に区別すべきであることなどは強調されているものの、接続詞と副詞の区別については言及されていない

で認め、時枝誠記⁶も接続詞を設定する立場をとった。これに対して、山田孝雄 (1908:535ff) では、接続副詞とし、接続詞を独立させて扱うことをしていない。山田 (1908) は、接続副詞を「ただし」や「もつとも」のような「文と文の媒介をなすもの」と、「また」や「かつ」あるいは「すなはち」のごとき「語または文の媒介をなすもの」とに二分している。接続詞の前にある先行要素と、後にある後続要素の性質、また、関係は重要なことであるので、あとでまた取り上げることにする。また、松下大三郎も同様に、副詞の一種としてとらえるという立場である⁷。

本稿は、品詞論の観点から接続詞などを論ずるものではない。ここでは、接続詞が副詞と連続的であること、それゆえに、接続詞という独立の品詞をたてるべきかどうかについては十分議論の余地があること、この二点を確認した上で、接続詞という用語を用いることにするが、これは、接続詞という品詞の設定を支持するものではなく、便宜上の措置である。

1.2. 意味・用法の記述

一般に、接続詞と接続助詞の用法については、前件と後件の関係から分類がなされている。本稿で扱う「逆接」も、その一用法とされていることが少なくない。ここでは、主な分類を検討しておく。

まず、橋本進吉 (1935:30f) では、接続詞を意味の点で4つに分類できるとし、「付け加わる意」(「及び」「かつ」「また」など)、「一つを選び取る意」(「又は」「或は」「それとも」など)、「当然の結果として起こることを表すもの」(「随つて」「それだから」「さうすると」など)、「当然予想し得べき結果に反した事や、前に述べたことに反する事を導くもの」(「然

⁶時枝誠記 (1950:139ff) では、接続詞は「辞」であり、「詞」とみれば用法と区別できることを述べている。時枝 (1950) の挙げる例は、「いづれまたおうかがひいたします」と「昨日はお邪魔しました。またその節は御馳走様になりました。」(旧字体は引用者が新字体に改めた)のごとき例で、前者を体言の副詞的な用法で「詞」であるとし、後者を接続詞の用法として「辞」と見なしている。橋本の詞と辞は形態論的なレベルでの区別であるから、その区分はおおよそ機械的な区分となることが多いが、時枝のそれは概念過程を経るか経らないかという基準によるものであり、ときにあいまいである。時枝の言語過程説では、言語そのものが対象化されることはないようであるが、言語のその sachlich な性質に着目して、言語そのものが客体としてとらえ返せると考えれば、むしろ、接続詞を用いる時点で対象化が生じているとも考えられるので、接続詞であることが詞でなく辞ということの根拠にはならないとも言える。このことは、ここでの議論には直接関わらないので、以上指摘にとどめておく。なお、阪倉篤義 (1986²:238ff) など、時枝 (1950) の考えをもとにしており、副詞の「また」を詞、接続詞の「また」を辞と説明している。

⁷松下大三郎 (1930b:211f) では、「花を観又月を賞す」の「又」は「月を賞す」を修飾しているので「副詞」であり、副詞が名詞を修飾することもあるので「英語及び佛語を學ぶ」の「及び」も副詞だとしている。山田孝雄の「接続副詞」は、文頭においてもつばら文と文を結びつける接続詞を念頭に置いているが、松下大三郎の場合は、語句と語句を結びつけるものを念頭に「副詞」とすべきことを主張しているので、接続詞は置かないで副詞と見るという結論は同じでも、それ以前の検討のプロセスは異なっていると言える。松下大三郎 (1930b:39ff) では、「接続詞は、接続性の副詞」とされ、実質的な副詞とは異なる「形式副詞」に、「於て」「以て」などの帰著副詞 (後置詞とも。漢文に由来する助詞的要素) とともに、所属させられている。

るに「けれども」「但し」「尤も」など)としている⁸。

接続助詞について、橋本(1935)では、格助詞に相当する第一種の助詞に続く「第二種の助詞」と扱われている。文法教授の指針という位置づけの橋本(1935)では、格助詞・接続助詞以外を第三種の助詞とし、三分類するにとどまっているが、橋本(1969)では、格助詞、連体助詞、間投助詞、終助詞、係助詞、副助詞、接続助詞、準用助詞、並立助詞の9種類に分けられている。そして、接続助詞は、「出たり入ったりする」の「たり」などのように、対等の関係で接続するものと、従属の関係で続くものとに区分できるとされている。

永野賢(1958:90ff)は、接続詞を6種類に分類している。まず、逆接⁹に相当すると考えられる「前のことがらとそぐわない、つりあわない、反対のこと」や「前とあとの対比」を表すもの、があげられている。続いて、「前件が原因・理由で、後件が結果・結末」を表したり、「きっかけ」や「前置き」を意味するもの、「付け加える」あるいは「前件と後件を並立させる」もの、「前件に対する説明・補足」を行うもの、「前件と後件の間での選択を行う」もの、「話題を変える」ものなどが挙げられている。接続助詞は、逆接、順接、前置き・事態の提示、並存・つけ加え・移行、の4種類に分類されているが、逆接と順接は、さらに既定と仮定に下位分類されているので、これらを含めると6類型に区分されていることになる。

『日本文学大辞典』の「接続詞」の項では、累加(添加)、並立、選択、転換、順接、逆接、説明、補説の8種類の用法が、『言語学大辞典 術語編』では、「接続」の項で、添加(単なる接続・並列)、選択、対立、譲歩、因由(原因・理由)・目的・結果、仮定・条件、時、説明、場所・比較の9種類が挙げられている。『国語学大辞典』では、「接続詞」の項で、順態(順接)、逆態(逆接)、時間的継起、事のきっかけ、累加(添加)、選択、並列、再叙、補説、転換の10種類を掲げている。同じく、「接続助詞」の項では、意味的分類として、まず、条件を表す 仮定と 確定に分け、条件を表さない 並置と その他に分け、はさらに順接と逆接とに分けられている。

田中章夫(1984)は、大区分としては、対等(並立)、承前(条件)、転換の3種類であるが、下位区分を含めると14種類あり、管見のうちではもっとも細かな分類となっている。「対等の接続」では、列挙、累加、選択、同一の4用法が挙げられ、「承前の用法」では、経過、前提、仮定、理由、説明、逆接¹⁰、例示、対比、限定の8用法が挙げられている。「転換」は、下位区分はなく、転換の用法のみである。

阪倉(1986²)は、接続助詞についても、おおよそ橋本(1935)の分類を引き継いでいるが、

⁸ここでは、原著とは異なる方式で...のようにナンバリングする。これは、以下で諸説を整理する際の便宜を考えてのもので、原則として出現順に番号付けている。橋本(1935)以下、永野(1958)、各種辞書類、小池(1997)も同じようにナンバリングしている。

⁹永野(1958)では、「逆説」の表記を用いているが、特に「逆接」と区別して用いているようではないので、ここでは統一性を保つために「逆接」の表記を用いる。

¹⁰田中(1984)では「逆説」の表記であるが、註9と同じ理由で、「逆接」と表記する。

意味用法としては、同時的または継起的な関係、順態接続的な因果関係、逆態接続的な因果関係、などが挙げられている。

小池清治(1997:243ff)では、接続詞を意味の面から 添加、 並列、 選択、 転換、 順接、 逆接、 説明、 補説、 の8種類に分類できるとしている。これらのうち、 は「語・句の接続」に用い、 以下は「文・節の接続」に用いるとされるものである。同じく、小池(1997:312ff)は、接続助詞の意味用法については、まず、順接と逆接に分け、それぞれを仮定、確定、恒常に下位分類している。また、順接の確定用法についてのみ、偶然と必然とに分けられている。

このほかに、塚原(1968, 1969)、佐治圭三(1970, 1987, 1991)、橋本四郎(1967)、湊吉正(1968)、永山勇(1968)、佐藤孝(1968)などがあり、適宜参考にしたが、ここで個別に取り上げることはしなかった。

1.3. 用法の整理と問題点

上で確認した各用法は、おおよそいずれの分類でも同じように扱われているものと、分類の方式によって細かさに違いのあるものがある。以上、警見したもののうち、橋本(1935)では、「順接」のような用語でまとめてはいないが、他の分類とそろえるために対応させると、 は「付加」や「添加」に、 は「選択」に、 は「順接」に、 は「逆接」に、それぞれ当たると考えられる。これを、一覧にして整理すると以下ようになる。

	順接	逆接	付加	選択	補足	転換	その他
A 橋本(1935)	順接	逆接	付加	選択			
B 永野(1958)	原因と結果	逆接・対比	付加・並立	選択	補足	転換	
C 日本文法大辞典	順接	逆接	累加 並立	選択	説明 補足	転換	
D 言語学大辞典	因由・目的・結果 仮定・条件	対立 譲歩	添加	選択	説明		時 場所・ 比較
E 国語学大辞典	順接	逆接	時間的 継起 契機 添加 並列	選択	再叙 補足	転換	
F 小池(1997)	順接	逆接	添加 並列	選択	説明 補説	転換	
G 田中(1984)	前提 仮定 理由	逆接 対比	列挙 累加 経過	選択	同一 説明 例示	転換	限定

むろん、同じ用語を用いていても同じ概念である保証はないが、それぞれの先行研究で例示されている接続詞を参考に分類していくと、おおよそこのような分類が許されると思われる。

ここで扱った6種類の分類案で、完全に共通しているのは「選択」という用法である。これには、「あるいは」のごとき例が挙げられているが、用語自体が一致しているだけでなく、内容的な齟齬もほとんど見られない。また、「転換」は「ところで」など、話題の転換を行うものを指している。「転換」は、すべての案に含まれているわけではないが、やはり用語が一致しているだけでなく、内容的にもおおよそ重なっていると言える。

上の表で「補足」とまとめたものは、いくつかの用法にさらに分けられている。まず、「つまり」や「すなわち」の類は、指示内容がおおよそ同じものについて表現を変えて述べる場合のマーカーと言えるだろう¹¹。いわば、「換言」のマーカーである。次に、「例えば」は、具体例を用いて説明を加えるときに用いるので、広い意味の「説明」に含まれるが、例えを持ち出して「例示」という点では確かに他の説明と異なる。「例示」のマーカーとして特に取り出すことが可能だろう¹²。但し、「例えば」は、「しかし、例えば…」のように他の接続詞を先行させて用いることもあり、その点を考えると、接続詞と分類すべきか若干検討を要するものであることは記しておくべきだろう。「なぜなら」は、前件に対する理由付けをしたり、根拠を提示したりすることで、前件により説得力を持たせるマーカーであり、「補足」の典型例のように挙げられている¹³。このほかに、「但し」などは、さらに情報を追加するという点で「説明」とは言えようが、理由付けを行うわけではなく、前件に対する留保や制限を述べるものである。これを独立した項目としてたてている分類案はないが、必要だろう。

「付加」という項目に一括したものは、前件に後件をまさにつけ加える「その上」のようなものがまずあり、これは他と区別して「累加」や「添加」の用語を用いているものが見られる。「忠司が来た。そして、優子が来た。」の「そして」などは、時間軸に沿って生じた出来事の順序であることを意味しており、「継起順序」とでも呼ぶべきものである。時間的な前後関係と解釈できる場合、前件から後件までの間に時間の経過があるはずであるから、「時間の経過」を本質と考えるべきではないだろう。「並立」あるいは「並列」と呼ばれているのは、「かつ」「および」などであるが、これらは「累加・添加」と明確な区別が難しい。

- 5) 人手が足りない。かつ、予算も十分でない。
- 6) 人手が足りない。その上、予算も十分でない。

¹¹この換言のマーカーに当たるものは、C、E、F、Gである。

¹²これを独立させた項目としているのはGのみであるが、Dは例として「例えば」のみをあげている。B、C、Fなどは「補足」などと括られているが、「例えば」もこの中に含まれている。

¹³独立して取り上げているのは、C「補足」、E「補足」、F「補説」、G「説明」などであるが、Bにも含まれている。

このような「かつ」は、「その上」に置き換えても、意味内容はほとんど変わらない。「かつ」の場合には、前件と後件に序列がなく、順不同に列挙している気持ちがあり、一方、「その上」の場合には、まず人手不足があり、それに加えて、予算も不十分だということになるのであって、これは、ある程度優先順位に近い序列が存在していることが想定される。「それに」「また」などは「累加・添加」に含められていることが多いが、すべての分類案で一致しているわけではない¹⁴。結局のところ、これも、序列をどれだけ意識しているかについては濃淡があり得ると考えざるを得ず、連続性を重視して一用法と見るか、用法の異なりがあると見て無理にでも境界線を画すか、という、分類作業につきまとういつもの問題が出来るわけである。

1.4. 順接と逆接

「順接」「逆接」という用語は、「順態接続」「逆態接続」の切り株語形とすることもあるようだが、「順態」「逆態」といった語を見出し語としている辞書は見あたらない。ただし、一般的な理解としては、「前件に対して後件が順当な結果と解されれば順接」で、そうでなければ「逆接」と考えてよさそうである¹⁵。この場合、「逆接」は、「前件に対して後件が順当でない結果」ということになるが、これは、「予期した結果にならない」あるいは「予想外の結果になる」と言っても趣旨は変わらない。もしも、《順接》が、順当で予想通りであることを意味し、《逆接》が順当でなく予想外であることを意味しているのであれば、順接・逆接という判断は、むしろ語用論的なものである。このことは、順接でも逆接でも成立するケースがあることから支持される。つまり、前件と後件の論理関係は、それらの意味関係による制限はあるものの、前件と後件の内在的な、本質的な論理関係があらかじめ定まっているのではなく、両者をどう関係づけるかという話者の認識を反映したものであるということである。

- 7) この商品は質がよい。だから、値段が高い。
- 8) この商品は質がよい。しかし、値段が高い。

¹⁴例えば、「また」は、C 「累加」、G 「累加」に挙がっているが、E 「並列」にも挙がっている。

¹⁵「順接」は、「二個の文または文節の接続の仕方、前項が後項の順当な理由、原因、きっかけ、成立条件などになっているもの。」(小学館『国語大辞典』)、「話の筋が、理屈の上で順序よくつながること。」(三省堂『新明解国語辞典 第五版』)、「ある条件に対して予期されるとおりの結果の現れることを示す表現形式。」(三省堂『大辞林 第二版』)といった定義が挙がっている(いずれも下線部は引用者による)。「逆接」は、「二個の文、または連文節の接続の仕方の一つ。前項と後項の間に、矛盾、対立する要素があるものとして結び付ける形式。」(小学館『国語大辞典』)、「前件から予測される事柄が後件において実現されない関係にあること。」(三省堂『新明解国語辞典 第五版』)、「ある条件に対して予期される結果の現れないことを示す表現形式。条件と結果との間に食い違いのあることを示すもの。」(三省堂『大辞林 第二版』)といった定義になっている(いずれも下線部は引用者による)。

前者は、「質が高い」ことから、「値段が高い」ということが予想されるものであり、その意味では《順接》の説明はおおよそ妥当する。しかし、「値段が高い」ことが「質が高い」ことの順当な「結果」と見るべきかについては検討すべきだろう。というのは、この種のものを先行する事態・できごとに対する結果として生じる事態・状態、広い意味での因果関係と見るのが、必ずしも妥当とは限らないからである。(8)は、「質がよい」という点では評価できるが、「値段が高い」という点は評価しがたいという関係を「しかし」で表しているわけであるが、これは後件が前件から予想できないということではなく、順当でないということでもない。この点では、《逆接》とは言い難い。しかし、これは、「対比」あるいは「対立」という説明であれば、妥当する。つまり、前件と後件が対比される関係になると考えることが可能だ。いくつかの分類案は、《逆接》以外に《対立》という説明をしており¹⁶、英語の談話標識を検討している Schiffrin (1987)でも、*but*の機能を《対比》(contrast)とし¹⁷、L'Huillier (1999)でもフランス語の *mais*の機能を《対置》(juxtaposition)だとしている。商品の「質がよい」ことは買おうとする者からすれば好ましい性質であるが、「値段が高い」ことは好ましからざる性質であって、これは単純で明確な対比となる。また、先に述べたように「質が高い」ことから「値段が高い」ことは、十分に推測可能であり、「順当な、予想される結果」と言えるものである。つまり、(8)は《対比》ではあるが《逆接》ではないということになる。

ここで《対比》と《逆接》と分けたものは、一般に「確定条件」などと言われるものである。「確定条件」は「仮定条件」と対立する概念とされる。「コップを落としたけど、割れなかった」は特定のできごとの描写であり、逆接の確定条件ということになるだろう。これを、逆接の仮定条件にすれば、「コップを落としても、割れない(だろう)」のようになる。この対は、接続助詞を使えば可能であるが、接続詞を使って仮定条件を表すことは難しい¹⁸。これは、仮定を一般に従属節で表し、帰結を主節で表すのが標準的な述べ方だからだろう。《逆接》の場合は、確定条件と仮定条件が単純に対立をなすことができるが、《対比》の場合は、単純な対立をなすとは考えにくい。「雨は強かった。しかし、風は弱かった。」は《対比》と分析可能だが、「*雨は強かった。それでも、風は弱かった。」あるいは、「*雨は強かった。そうだとし、風は弱かった。」のようにすることができない。これは、接続助詞を使うことで「雨は強

¹⁶さきに検討した永野(1958)は、「前の事がらとそぐわない、つりあわない、反対のこと、前とあとの対比」としており(これを本稿の表では「逆接・対比」と略記している)、逆接と対比の両方の要素が入っている。そのほか田中(1984)は、逆接と対比をそれぞれ一項目としてたてている。『言語学大辞典』は、対立と譲歩に分けてはいるが、逆接という表現は見られない。他は、逆接とのみ表現している。

¹⁷Schiffrin(1997:152ff)では、*but*の基本機能をcontrastとし、対比されるもの(例えば、概念や動作など)で分けて分析している。

¹⁸「コップを落とした。しかし、割れなかった。」は可能であるが、「コップを落とす。そうしても、割れないだろう。」は認容度が低いだろう。ただし、「コップを落とすとす。そうしても、割れないだろう。」のように、明確に仮定条件であることを表す要素を用いれば可能である。仮定条件も含めた逆接の論理関係の整理は、前田直子(1991, 1993)を参照されたい。

かったとしても、風は弱かった。」のようにすることはできるが、「強かったとしても」では事実の叙述ではないので、意味が変わってしまう。「雨は強いだろう。しかし、風は弱いだろう。」も、「*雨は強いだろう。そうだとすると、風は弱いだろう。」とはできないし、「雨は強いだろうにしても、風は弱いだろう」では意味が変わってしまう。本稿では、主として接続詞による接続を分析の対象としているので、仮定条件の逆接の分析は別の機会に譲るものとする。

順接は、おおよそ原因と理由など因果関係ととらえられるものが主であるが、前提や仮定など前件が後件に対して条件節のようになっている場合も含まれていることが多い。しかし、「なぜなら」と「だから」が同じように順接に含まれていたり、「目的」の用法がここに含まれていることもあり、混乱させられることも多い。

- 9) 彼は第一志望の大学に合格した。なぜなら、寸暇を惜しんで勉強にいそしんだからだ。
- 10) 寸暇を惜しんで勉強にいそしんだ。だから、彼は第一志望の大学に合格した。

「なぜなら」は、結果を前件に置き、それに補足する¹⁹形で後件に理由や根拠を提示するので、前件に理由や原因を提示しておき、後件で結果を示す「だから」とは、順序が逆になる。したがって、(9)と(10)では、「なぜなら」と「だから」で前後の内容は入れ替わっており、また、両者を交換することもできない。「目的」と呼ぶべきものは、次のような例文で検討することが可能だろう。

- 11) 彼は第一志望の大学に絶対に合格しようと思った。だから、寸暇を惜しんで勉強にいそしんだ。
- 12) 彼は第一志望の大学に絶対に合格しようと思った。そのために、寸暇を惜しんで勉強にいそしんだ。

これらの例文では、前件に合格するという目的があって、後件にその目的を達成するための行為が来ている。その意味では「目的」と言えなくもないように見える。しかし、(11)は前件に「合格しよう」という意志や希望があり、その意志や希望があることの結果として後件の行為がなされているとも分析可能だ。つまり、前件が後件の理由と考えることができるのである。(11)の場合、前件が単独で「目的」と見なすべき内容を表しているのであり、接続の関

¹⁹補足あるいは補説に「なぜなら」を含めている分類もある。

係を「目的」と見る必要はないだろう。(12)の「そのために」は、(11)と同じ意味に解することも可能であり、また、「合格するために」の意味に解することも可能で、意味的にはあいまいである。

前件が原因や理由で後件がそれに対する結果となっている場合、つまり、因果関係と説明可能な場合には、一般に「順当で予想可能」と言えるだろう。しかし、(9)のように「なぜなら」で接続されるような場合については、さきに結果が提示されるので「予想」を行うというようなものではない。しかも、「順当で予想可能な結果」だから、《順接》というわけでもないのである。

- 13) 工藤君は成績優秀だった。そして、工藤君の弟も成績優秀だった。

この場合、「そして」の代わりに「それに」や「その上」や「また」も可能である。これらは、《累加・添加》に分類される接続詞であり、工藤君が優秀であるという前件にその弟も優秀であるという後件が追加されていると説明可能である。その意味では、《累加・添加》という分析は妥当だろう。しかし、前件から後件は「予想可能」とも言えるだろうし、前件から見て後件は順当な結果とも言えるものであり、その意味では《順接》と分析されて然るべきものである。しかし、因果関係と見るのは難しいし、また実際に、「そして」を「だから」に置き換えてもあまり自然とは言えないだろう。順接には、ほかに仮定条件といった意味も関わってくる可能性があるが、ここでは指摘するにとどめ、扱わない。

1.5. 語用論的観点からの先行研究

前節までに取り上げた諸研究は、主に品詞論の観点からのものであったが、これ以外に談話における接続の役割を話者の知識や認識、それとかかわるモダリティや発話行為などの観点から分析した研究が近年見られる。主なところでは、岩澤治美(1985)、北野浩章(1989)、甲田直美(1994)、浜田麻里(1995a, 1995b)、渡部学(1991, 1995a, 1995b)などがある。

北野(1989)は、横林宙世・下村彰子(1988)を参考に、「ところが」と「しかし」の談話における機能を比較したものである。北野(1989)は、「しかし」が可能なところで「ところが」が使えない場合について検討し、「ところが」は後件に話者関与性が強い述語をとることができないと分析した。話者関与性は、話者がその命題(この場合は、後件に述語を含む命題)の情報の入手・提示・構成の責任とその関わりの度合いのことで、具体的には、命令や禁止のほか、モーダルな要素、受動文などが話者関与性が強く、「ところが」の後件に現れることを制限されているという。浜田(1995a, 1995b)は、話者関与性では説明不可能なケースがあることを示し、話者の知識の相違で説明されると主張している。発話者Aの発話を前件として、発

話者Bが「ところが」あるいは「しかし」を用いて後件に相当する内容を発話する場合、「ところが」は発話者Bから見て前件が予想外である場合には使えない。「しかし」にはこの種の制限はかからない。一方、前件を発話者Bがよく知っている場合には「ところが」のほうがより自然になる、と浜田(1995a)は分析している。浜田(1995a, 1995b)は、「しかし」と「ところが」の談話における違いを主たる分析対象としており、本稿とは関心が異なる。しかし、重なる部分もあり、後節で再び言及する。

1.6. 問題点の整理

前節までの検討に見るように、順接あるいは逆接という場合、その定義が不明確である。因果関係と解釈できる場合は「順当な結果」に該当するが、「予測可能な、順当な結果」であれば、《順接》の接続詞が用いられるとは限らず、必要十分の関係として規定されてはいることが分かる。逆接に関しても、対比と順当でない結果は区別されなければならないはずなのに、区別されていないことが多い。もう一度、用法を整理して、定義し直す作業が必要だろう。

第二点としては、やはり、接続詞の品詞論上の位置づけである。接続詞として挙げられているものの中には、重ねて使えるものがいくつか含まれていることがある。

- 14) この試験はそう簡単に受からないといわれている。でも、だからやりがいがあるのだ。
- 15) この規約は細部においては非常にあいまいである。だから、例えば微妙なケースを扱う場合は、実質的に用をなさなくなるだろう。
- 16) 「でも、それにしても、困るよねえ。」

「でも」も「だから」も「例えば」も、接続詞として取り上げられている例である。接続詞が副詞と非常に近い関係であることは、かなり早い時期から指摘されてきているが、十分に解決されたとは言えない状況にある。接続詞という品詞を設定する場合「接続」という機能に着目しているわけだが、他の文や節との関係を見なければ判断できないというのでは明確な基準にならない。それ自体が統語特性としてどういう属性を持っているのかなど、いくつか明らかにしなければならないことがある。(14)の「だから」は、文章論的には前件を後件の理由として仕立てる機能を持っているが、これを接続のはたらきと見るべきなのか検討する余地はある。前件と後件の論理関係を示すことがそのまま《接続》と言えるのだろうか。無検証に、論理関係化を接続と決めつけているのでは、副詞と接続詞の境界線を引くことは難しいだろう。(16)は、会話などで見られるもので、「でも」と「それにしても」という、いわゆる逆接の接続詞を重ねて使っている。この場合、「それにしても、でも」という順序では不自然である。

このことは両方とも接続詞と見ていいのかという問題とともに、重ねて使う場合に位置に関する規則があることが考えられ、位置の指定或いは出現順序の序列について検討する必要があることを示唆している。

第三点としては、従来の接続詞の分析が談話における機能を考慮していないということだ。書かれた文章として存在するものなどを接続詞の典型的な使用ケースとしているため、使用者（書き手あるいは話し手）が変わる場合には、有効な分析とならないケースが考えられる。談話などで見られる用法が従来の用法では説明できないケースは、白川博之(1995)などが扱う理由を表さない「だから」の用法などにすでに指摘されているが、全体を見回してみると語用論的な観点からの研究が最も必要とされているのにも関わらず、実際には十分になされていない憾みがある。

(4)の「しかし」は、前件と見なすべきものがない状況で使われているのであったが、文章のなかで用いられる接続詞類だけを検討の対象とした研究では、このような用法は説明できないだけでなく、検討対象にもならないであろう²⁰。本稿では、機能論的に見るのであれば、接続詞と呼ばれてきたものの多くは、談話標識と見なすべきだと考えている。談話標識のうち、前件と後件の関係を示す機能を持つものは接続詞と見なすべき属性を持っているが、その場合も、前件との照応の度合いなどを反映して、接続詞としての属性の強さが変わりうるというのが本稿での基本的見解である。次章では、この点について語用論的観点から検討し、予備的な議論を行った上で、分析と整理を行う。

2. 照応現象としてみた接続

一般に「接続」という現象は、前件と後件があり、それを「つなぐ」ものであると理解されている²¹。しかし、接続詞を取り除いても成立することは少なくなく、「つなぐ」と表現することが適切かどうかも疑わしい。しかも、前件部分が存在しないと思われるケースや、前件部分が明確でないケースもあり、このことはさらに「接続」という機能を第一義にとらえるべきなのか疑念を強くさせる。

2.1. 接続の有無による分類

語用論的に見れば、前件部分は後件部分と意味的に関連づけるべき対象であり、これは広義の前方照応の一種と考えることができる。このことは、接続詞の一部が指示詞を含んでいるこ

²⁰厳密に「接続」という機能を考えれば、むしろ接続詞とは言えなくなる。例えば、小池(1997:200)では、「しかし、すごかったね、今の地震。」のような「しかし」について、「この『しかし』は感動詞で独立語」と注記している。

²¹もっとも、時枝誠記は、接続詞を物と物とを連結する連結器のようにイメージされることに対して、単なる比喩に過ぎないと釘をさしている(時枝(1950:137))。

とともに無関係ではない。もちろん、接続詞に数えられるようになると、指示詞に由来する部分も照応機能が減退していることも考えられ、実質的に照応と見るべきではない場合も考えられる。

- 17) 【真夏。道を歩きながら、いきなり隣の友人に言う。】
「それにしても暑いよね。」
- 18) 【二人でもう一人の友人を待っている。】
A 「さっき、少し遅くなるって電話があったよ。」
B 「それにしても、遅いね。」

前者の「それにしても」は、先行する発話のない状況で突如として発した発話の冒頭にあるもので、当然のことながら、「それ」が指し示すものは見あたらない。これは照応先がない例と分析することになる。後者は、Aの発話を受けてBが発する発話の冒頭にあり、「それにしても」の「それ」は「少し遅くなるって電話があった」ことを指している。この場合、Bの発話で用いられている「それにしても」の照応先はAの発話の中にある。照応先がどこにあるかということで分けるとすれば、自己の発話にある場合と自己の発話以外（たいていは他の会話参加者の発話）にある場合とに大きく二分できる。このほかにも、同一ターン内の自己発話か、直前の相手の発話かなど、区分する観点は存在しうるが、ここでは深入りしないでおく。文章などは、たいてい特定の単独の書き手が綴ったものであれば、長い自己発話と見ることができらるだろう。

このことは、意見の対立が見られる場合には、重要になる。例えば、(18)のやりとりは、BがAの考えを否定する関係にはなっていないので、単独の発話者の発話として接続しても成立する。

- 19) 「さっき、少し遅くなるって電話あったよ。それにしても、遅いね。」

しかし、複数の会話参加者の間で意見の対立があるような場合には、このようなことは不可能である。例えば、(20)は(21)のようにすることはできない。

- 20) A 「この計画は中止すべきだよ。」
B 「でも、そんなに簡単に中止にすべきじゃないと僕は思うね。」
- 21) * 「この計画は中止すべきだよ。でも、そんなに簡単に中止にすべきじゃないと僕は思うね。」

- 24) 明日は月末の金曜日で道は混んでるだろう。先方はお忙しいようだし、私も用事が立て込んでいる。それに、いつも使っている道が工事中で、時間がかかりそうだ。だから、30分ほど早めに家を出ることにしよう。

これらの例文ではいずれも「だから」が用いられている。しかし、照応先の範囲は、同じように単純に決められるわけではない。(22)は、直前の文全体が参照すべき内容になっている。つまり、「東西線は7時半を過ぎると混んでくるから」ということが、後件に対して必要な理由内容になっている。これは、「だから」のスコープが直前の文全体に及んでいるということでもある。

しかし、(23)の場合は、直前の文全体が「だから」のスコープかと言えば必ずしもそうは言えない。「各地で水不足になった」原因は、「今年の夏は / 雨が少なかった」ということであり、「平年に比べてかなり気温が高」いことは、無関係ではないにしても、水不足の直接的な原因とは言えないだろう。厳密に原因を考えていくと、どうしても、文全体をスコープとは考えにくくなる。しかし、「今年の夏は平年に比べてかなり気温が高く、雨が少なかったので、各地で水不足になった。」のように、直前の文全体を接続助詞で取り込むことは可能である。このことは、「平年に比べてかなり気温が高」いということが、二次的な関連情報として理由の節の成立を阻害しないことの証拠にはなるが、このことが理由の一部をなしている証拠だとは言えないだろう。

また、スコープが直前の一文に限定されているわけでないことは、(24)のようにいくつかの文が連続しているケースを検討してみると分かる。(24)は「30分ほど早めに家を出ることにしよう」と決断する理由がその直前にあるが、最も直接的な理由としては「いつも使っている道が工事中で、時間がかかりそうだ」ということであるものの、この一文には「それに」がついている。結局、「明日は月末の金曜日で道は混んでる」という推測も「時間がかかる」ということの理由になると考えられる。これは、「それに」という《累加・添加》と分析される接続詞がついており、「道が混んでいる。それに、いつもの道が工事中だ」という2つの理由が示される構造と考えたほうが全体につじつまがあうことから分かる。しかし、その間にある「先方はお忙しいようだし、私も用事が立て込んでいる」という一文は、「時間がかかる」ということの理由ではなく、「時間を無駄にしたくない」あるいは「早めに用事を済ませたい」ということの理由と見るべきだろう。つまり、(24)の「だから」のスコープは、以下の波線部と考えるのが妥当である。

- 24') 明日は月末の金曜日で道は混んでるだろう。先方はお忙しいようだし、私も用事が立て込んでいる。それに、いつも使っている道が工事中で、時間がか

かりそうだ。だから、30分ほど早めに家を出ることにしよう。

以上の観察から分かるのは、スコープは一文全体とは限らず、文の一部（複文や重文であれば単一の節のみ、など）でもよいということであり、また、文という単位を越えて、複数の文をスコープとすることも可能だということである。加えて、スコープは、他の要素が間に入ることがあり、いわば「途切れる」こともありうるということである。(24)の場合、照応先にならない、スコープ外の部分を直前におくと、やや不自然になる。

- 25) ?明日は月末の金曜日で道は混んでるだろう。それに、いつも使っている道が工事中で、時間がかかりそうだ。先方はお忙しいようだし、私も用事が立て込んである。だから、30分ほど早めに家を出ることにしよう。

このことは、原則として直前の文にスコープ対象域があるということだろう。(25)の場合、直前の一文はまったく無関係な情報ではなく、「時間」という点では、後件の内容とかがわっている。これに対して、(26)のように、無関係といえる情報が直前に置かれると、不適格と見ていいほどになる。

- 26) *今年の夏は、平年に比べて気温がかなり高く、雨がほとんど降らなかった。クーラーの売れ行きは記録的だった。また、水の事故が多かったことも記憶に新しい。だから、各地で水不足になった。

この場合、「だから」は、直接的には、「雨がほとんど降らなかった」と結びつく。「水の事故が多かったことも記憶に新しい」ということは、「各地で水不足になった」とことは関係がない。このことから、関係の強さの度合いが成立にかかわる重要な要因になっているとは言えるだろう。つまり、直前の文（あるいはその一部）に照応先があれば問題はないが、それが「途切れる」ことになると成立しないと考えられる。ここで言う「途切れる」とは、無関係な、あるいは、関係の薄い内容が間に挟まることで、照応がうまく成立しなくなることである。したがって、それ自体が照応先でなくとも、照応を妨げない程度にかかわりのある内容であれば、「途切れない」と判断されることもありうる。

2.3. 談話標識としての機能

談話標識は、ごく一般的な定義で言えば、発話内容や発話行為を対象化することで、その位置づけや方向性あるいは先行する発話や文脈との関連性、また、自分の発話内容や発話行為に

ついて発話者がどう捉えているかといった解釈，などについて表示し，会話のやり取りや談話の構成がよりのぞましい状態になるように，わかりやすい目印をあたえる機能を持っている²³。談話標識は，品詞論的には，副詞(特に文修飾の副詞)や接続詞あるいは感動詞に分類されるものが多いが，動詞などから作られて成句として定着したものも少なくない。本稿では，談話標識は，先行する発話との論理関係を表すもの，導入される発話の種類を先取りして示すもの，発話の確信度や認識のあり方などを予告する機能を持つもの(モーダルな要素)，知識管理に関する理解などを示したり確認したりする機能を有するもの，発話に注意を向けさせる機能を有するもの，非自己発話(相手の発話)の受容のあり方について予告する機能を持つもの，に大まかに分けることができると考えている。ただし，これらは主な機能を挙げたもので相互に排他的な分類になっているわけではなく，ひとつの談話標識が重複して複数の機能を持つことも考えられる。また，これらの機能は，談話標識が独占的に担うわけではなく，終助詞など通常は談話標識に数えない要素が担うこともある。具体的な例で検討しておく。

- 27) すべての検査項目が正常値の範囲内です。したがって，再検査の必要はありません。
- 28) 【書店で，客が店員に言う】客「こういう本を探しているんですが...」
店員「その本は，ちょっと，置いておりません。」
- 29) 「なんか，暑くない？」
- 30) 【先行文脈なしで】「それにしても，暑いねえ」
- 31) 「あの一，お願いがあるんですが」
- 32) 「お味はどうですか？」「まあ，悪くないよ。」

(27) の「したがって」は，前件を理由に判断した結論・結果を後件に示すことを伝える機能を持っている。この点で，前件と後件の論理的な関係をマークしている (...) といえる。(28) の「ちょっと」は，後件に聞き手にとって好ましくないこと(具体的には，拒絶や否定)が現れることを予告する機能があり，これは，ネガティブな応答が発話されるということをマークするものである (...)。「ちょっと」のこの用法は，あからさまな拒絶となることを避けてやわらげる機能があり，また，談話標識として定着しているため，「ちょっと」だけでも拒絶の応答になりうる。(29) は，絶対的な確信をもって言うわけではないこと，後続する内容の真偽について排他的な主導権をとる意志のないこと(したがって，同意してもらわなくてもか

²³Verschueren (1999:189) では，discourse marker (他に，pragmatic marker, discourse particle, pragmatic particle などの言い方がある) について，a wide range of indicators of metapragmatic awareness と表現している。本稿でいう「発話を対象化する」ということは，metapragmatic であるということと大きく重なると思われる。

まわらないということ、同時に伝えることになる)を「なんか」であらわしている。これは、発話の確信度や認識のあり方を予告する機能を持っている(...)と言えるが、それによって発話にどう責任を持つか、発話に対するどういう処遇を許容するかということも間接的に伝えているので、この点では の要素も入っていると言えるだろう。(30)の「それにしても」は先行文脈がない状態で突如として発する発話の冒頭に現れるものであるが、これは、すでに聞き手も知っていること、心得ていることを話し手が知っていることを示している。つまり、共通認識あるいは共通理解となっていることを確信的に理解していることを示すのである。すでに分かりきったことを言うのであるから、このことは、発言するだけの意味を持たないと解釈される内容であるとも言える。それでもあえて発言するという発話者の意思、あるいは、分かっているにもかかわらずはおれないという気持ちがあることを示すことになる。これが「それにしても」であり、あとで分析する「しかし」も同じように説明できる。これは、相手の知識に関する発話者側の理解(知識)についての情報とそれに伴う発話の姿勢をマークしている(...)。 (31)の「あの一」は、無意味で無機能な間投詞と解されることもあるが、ないと唐突な印象を与えたり、聞き手の注意が十分に向けられていない場合には聞き手が発話の冒頭部分の一部を聞き逃してしまう可能性もある。それを回避する目的もあり、聞き手の注意を向けさせる機能をもっているといえる(...)。 (32)の「まあ」は、やや躊躇や逡巡を伴う発話であることを伝える機能があり、逆にいえば、断言するような内容がくることはないと言告することにもなる。これにより、相手の問いかけに対して、強い否定などが現れることはないということをおあらかじめ伝える働きをしているともいえる(...)。

以下では、「しかし」など逆接の接続詞と従來說明されてきたものが、談話においては接続の機能を果たさず、上に示した の機能を有していることを含め、「逆接」と見るべきなのかについて検討する。

3. 逆接ではない「しかし」

さきに、1.4. で確認したように、《逆接》は前件から見て「予測と異なる」あるいは「順当でない」結果が後件に来ることを一般に指しているが、実際には「しかし」や「でも」など《逆接》の典型のように扱われる接続詞でも、《逆接》とは言えないケースが少なくなかった。ここでは、まず、従来の《逆接》が性質の異なる《対比》と明確に区別されないままに用いられることの多い概念であり、両者がはっきりを区分可能な別々の用法であることを指摘する。その後、2.1.でたてた語用論的な区分に従って、照応先を持たない「しかし」などの用法について検討する。

3.1. 対比とは？

典型的な《逆接》と解釈されるのは次のようなケースである。

- 33) 一雨来そうな空模様だった。しかし、雨は降らなかった。

これは、前件から「雨が降った」という結果が順当だと言えるので、「雨は降らなかった」という、順当でない結果を表す《逆接》だと言える。しかし、次のような例だとそういう説明はできない。

- 34) 太郎は90点だった。しかし、次郎は20点だった。

これは前件から後件が予想できるようなケースではない。試験の成績は個々人で異なるのが普通であり、太郎が高得点であることから次郎が高得点であるのが順当だとは言えないし、また、次郎の点数が低ければ順当な結果ではないとも言えない。(34)のような例文は、《逆接》では説明されず、《対比》²⁴と説明されることになる。渡部学(1995a)は、逆接表現を意味的に3種類に分けており、ここで典型的《逆接》としたものを「推論的逆接」、《対比》としたものを「対比的逆接」と呼んでいる²⁵。渡部(1995a:595)は、後者では、肯定否定を含む、広い意味での対比が述語部分で見られるとしている。確かに、一般的には述部が対照的な事態や状況を表していることが多い。

- 35) 山下は来た。しかし、伊藤は来なかった。

- 36) 昨日の味噌汁はうまかった。しかし、今朝の味噌汁は塩辛い。

しかし、次のような例を見ると、述部要素というよりは、副詞的要素の対比になっている。

- 37) 今田は車で行くらしい。しかし、松本は電車で行くという。

そして、次の(38)のような例では、むしろ述語要素は同一だと見るべきだろう。

- 38) 教員数が多い。しかし、学生数も多い。

- 39) 教員数が多い。しかし、学生数は少ない。

²⁴ 「対比」以外に、「対立」「対置」などの用語も見られるが、ここでは「対比」を用いる。

²⁵ もう一つは、「感情的逆接」と渡部(1995a)が呼ぶもので、本稿で先行発話がないままに用いられるとした用法とほぼ同じである。これは、3.5. で取り上げる。

(38) の場合、教員数の多さから学生数の多さは、むしろ推測しやすいことだろう。これは、環境のよさとして「教員数が多い」ことをあげ、環境の悪さとして「学生数が多い」ことをあげていると考えれば、《対比》である。(39) は、単純に多いことと少ないことが対比されるので、述語要素における対比といってもよいが、(38) はそうは言えないだろう。これを、二重主格構文（総主文）における第一主語（大主語）に対する述語部分と見ることは不可能でないが、そこまでして述語部分の対比と説明する必要もないだろう。《対比》は(38)のように「好ましいこと」と「好ましくないこと」という事態全体が対比されていることもあるのであり、単純に《対比》としての解釈が成立するという条件であればよい。

では、対比解釈の条件とはなんだろうか。次の(40)は成立するが、(41)は成立しないことから、《対比》という解釈の成立要件として、事態が同一でないことが必要だと考えられる。

- 40) 太郎は90点だった。しかし、次郎は 89点だった。
 41) *太郎は90点だった。しかし、次郎は 90点だった。
 42) 太郎は90点だった。しかし、次郎も 90点だった。

90点と89点は僅差で実質的には同じような評価が与えられるかもしれないが、厳密に言えば同じでない。違いがあるから、かろうじて《対比》が可能だと言えるだろう。また、(41)は「しかし」だけでなく、「は」を「も」に変えないと不自然な感じが残る。これは、事態が全く同一だからである。ところが、(42)のようにすると、対比される次元が変わってくる。(42)は、前件で「太郎が優秀であること」あるいは「太郎に高い評価を与えるべきこと」が含意²⁶される。前件のみで、後件が示されないときは、前件の、このような含意は有効である。しかし、後件が示されると、その含意は有効ではなくなり、「太郎はそれほど優秀ではない」あるいは「太郎にそれほど高い評価を与えなくてもよい」という、《含意の修正》が必要になる。つまり、前件と後件で同一の事態や状況を述べていながら、《対比》の解釈が成立するのは、前件の含意に対する修正解釈が後件の提示によって発生する場合である。

以上のことは、次のようにまとめておいてよいだろう。

43) 《対比》接続の同一性に関する条件

「しかし」や「でも」を用いて、前件と後件が《対比》関係をなして接続される場合、

²⁶ここで、「含意」と言っているのは、「論理的な含意」あるいは「意味論的な含意」ではなく、「文脈的な含意」の意である。

前件と後件の表す事態や状況が同一でなく、相互に異なっている場合は、前件の表す事態・状況と後件の表す事態・状況がそのまま《対比》として解釈される。

前件と後件の表す事態や状況が同一の場合は、前件だけに対して与えられる評価や意味付けなどの文脈的含意を、後件を示すことで修正することによって、《対比》の解釈となる。

3.2. 逆接とは？

渡部 (1995a:595) では、《逆接》(渡部 (1995a) では「推論的逆接」) について、「前件から日常言語的に推論される命題を介して、後件がその推論に相容れない」と説明している。

いくつか例を見てみよう。

- 44) A大学は優勝候補の筆頭にあがっていた。しかし、一回戦であっさり負けてしまった。

この場合、前件から「そんなに簡単には負けない」という推論が可能であるが、後件でその推論が成立しないことになる。また、推論を行わなくとも前件がある種の判断や予測を明示的に含んでいる場合があり、その場合にはその判断・予測が後件によって成立しないことになればよい。

- 45) 一雨来そうな空模様だった。しかし、雨は降らなかった。

(45) では、後件の提示によって、前件の「一雨来そう」という判断が否定されることになり、前件に関して推測を行う必要はない。したがって、《逆接》を厳密に定義すると、「前件にかかわる判断(常識的に成立する推論を含む)が後件によって成立しなくなる」ような接続ということになるだろう。《逆接》の場合は、前件そのものがある種の判断を含んでいるか、あるいは常識的に推論可能な判断が存在すると考えられる。この「常識的な推論」や「予測」は語用論的なもので、また、個人差があるであろうことも否めないが、やや曖昧な用語である。

《逆接》と分析される接続は、前件から予測・予想されるのとは異なる結果が後件に現れると説明されることがあるが、時系列上の継起順序をそのまま反映しているとは限らない。

- 46) 僕は二時間以上待った。でも、結局、薫は来なかった。

- 47) 結局、薫は来なかった。でも、僕は二時間以上待った。

(46) は、「来なかった」ということが結果であるとすれば、時系列上の継起順序に従っている。(47) は、その前件と後件を逆転させたものである。これは「来なかったのにもかかわらず、二時間以上待った」ということであるが、「でも」で接続可能である。では、次の場合はどうだろうか。

- 48) 私はテレビの電源を入れた。しかし、テレビはつかなかった。
 49) *テレビはつかなかった。しかし、私はテレビの電源を入れた。

後者は不適格である。(48) (49) の場合は、「電源を入れる」という動作と「テレビがつく / つかない」という結果の継起順序が明確であり、「テレビはつかなかった」というできごとは特定個別の結果としか解釈しようがない。(47) の場合は、「薫は来なかった」という前件から、「来ると思っていた」という前提状況、あるいは、来てもおかしくないという前段的認識があったことが推定可能であり、後件はその推定と関わる「待った」という動作の叙述になっている。この場合、厳密に言えば「薫が現れない」という事態は継続的に続いていたのであり、「待つ」ということに対して生じる反応とは言えない。これに対して、(49) の場合は、「テレビはつかなかった」という状況は、「電源を入れた」という動作が先にあり、それに対する反応の結果と言えるものである。つまり、働きかけとその反応という関係になっており、時間軸上の前後関係がかなり明確に指定されていると言える。このような場合には、前後を逆転させることはできないのである。

渡部 (1990:60ff) では、前件が心理動詞などを伴った場合の接続詞の可否について検討している²⁷。

- 50) ? 彼はブレーキを踏んだ {と信じている / つもりだった}。しかしスピードが下がった。
 51) 彼はブレーキを踏んだ {と信じている / つもりだった}。しかしスピードが下がらなかった。

これについて、渡部 (1995a:596) では、(51) について、「前件からブレーキを踏んだ」ということは含意されず、したがって、後件と相容れないというものではなく、「推論的逆接の論理構造に抵触するはずであるが、実際には許容される」と述べている。しかし、(50) (51) の前件は、「ブレーキを踏む」という意図があったことを論理的に含意し、したがって、「スピー

²⁷例文はいずれも渡部 (1990:62) から。文の適格性の判断も渡部 (1990) のもの。また、渡部 (1995a) にも同様の議論がある。

ドを落とす」という意図・目的があったことが推論される。とすれば、前件から推測される意図とは異なる結果が後件で示されているのは、(51)であり、これが適格なのはむしろ自然である。(50)は、後件は意図通りの結果であるから、《逆接》となるのは論理的に不自然である。

このことは、心理動詞や認識判断を表す表現であるかどうかということではなく、これらの前件においては《意図》は読み取れるものの、《事実》についての最終判断を下せないというところにポイントがあると考えられる。渡部(1990, 1995a)が言うように、これらの前件から「実際にブレーキを踏んだか」どうかを判断することは不可能である。ただ、わざわざ信念や認識として表現していることから、また(51)については後件の内容から、「実際は踏んでいない」だろうと想定しやすいということに過ぎない。しかし、《意図》は厳然として存在することが読み取れる。とすれば、ここでは明確な《意図》のほうが、重要な役割を担うことは道理である。関連性理論の枠組みで言えば、より多くの文脈的想定を引き出すことが可能であり、より文脈効果が大きく、またより関連性が高い。

3.3. 対比と逆接

前件と後件の非同一性によって対比される場合、違いが対比を形成する主要因となるので、対照的な関係が分かりやすい。一方、「太郎は満点だった。でも、僕も満点だった。」のように、前件と後件が同一の事態の場合には、後件が前件に対して、推論や解釈の《修正》を行うものであった。しかし、次のような単純な非同一性の対比では、修正がなされるとは考えにくい。たとえば、次の対比では、前件に対して解釈の修正を行う必要はない。

- 52) 太郎は満点だった。しかし、僕は0点だった。
 53) 太郎は90点だった。しかし、次郎は89点だった。

これは、事態どうしの対比になっているためである。

- 54) 今回の数学のテストで、僕は60点しか取れなかった。でも、クラスの平均点は25点だった。
 55) 太郎は数学のテストで90点とった。でも、次郎も89点取った。

この場合、(54)では前件から生じる「60点はあまり評価が高くない点数だ」という推測が、後件から「それほど悪くはない」と修正あるいは精密化される。(55)では、前件から「太郎は優秀だ」という推測が可能だが、後件によって「太郎だけが優秀なのではない」という修正あるいは情報の追加がなされることになる。

語用論的に見ると、相手の発話を受けて「でも」あるいは「しかし」で始まる発話を行う場合、相手の発話の文脈想定（平たく言えば発話者の事態に対する解釈）に対する修正（情報の精密化や情報の追加、また、訂正や否定も含む）を意図している場合がある。

- 56) A「なんだ。60点じゃないか。」 B「でも、クラスの平均点は25点なんだよ。」

この場合、Aの発話は60点という得点を「よくない点数」と解釈しているのであるが、Bの発話は「それほど悪い点数ではない」という解釈にAの解釈が修正されることを意図していると言える。(56)の「でも」の用法は、2.1. で三分類したうちの「照応先が非自己発話に存在するもの」、つまり、相手の発話内に、逆接の前件に相当する部分があるケースである。

「でも」や「しかし」は、反論に用いる機能があるとされるが、次のように全否定になると、用いることはできない。

- 57) 「ここ、間違ってますよ。」「*でも、間違っていないよ。」
58) 「次は右折ですね。」「*しかし、左です。」

全否定は、照応先の内容に対する《修正》とはならない。次のような例では、「しかし」が使用可能であるが、これは全否定ではなく、《修正》あるいは《追加》と解釈されるからである。

- 59) 「安井君は欠席だってさ。」「でも、私は来るって聞いたよ。」
60) 「僕、この仕事、やってみるよ。」「でも、その仕事はやめておいたほうがいいと思うよ。」

前者は、「でも」は「安井君は欠席だ」ということを照応先にするのではなく、「安井君は欠席だと聞いた」ということを照応先にしている。つまり、相手が「安井君は欠席だ」という情報を得たことは否定せず、自分は「安井君は来る」という情報を得たことを示し、解釈の修正の必要性あるいは、別の情報の追加を意図していると言える。(60)は、相手の考えと自分の考えという対比になっているため、成立するのである。つまり、「しかし」や「でも」の場合、反論をするとは言っても、前件部分がまったく成立しないような内容を後件に提示することはできないわけである。このことは、語用論的には、前件の《修正》や《追加》の談話機能を持つのであり、前件を《否定》するものではない、と説明できるだろう。

先に、前節で「しかし」の中には《逆接》と分析できないものがあり、それは《対比》と分析すれば説明可能であるということを示した。では、《逆接》と分析可能なものは《対比》ではないのだろうか。つまり、両者は排他的な関係と定義してよいのだろうか。

- 61) 天気予報では午後から雨ということだった。しかし、私は傘を持ってこなかった。
- 62) 今年のA高校の野球部はいい選手がそろっていた。しかし、予選の一回戦で負けた。
- 63) 「前田君は、残業ばかりで、すごく仕事が大変なんだってね。」「でも、給料は結構高いんだって」

(61)(62)(63)は、前件からの予測から外れた内容が後件に来ている。つまり、後件が前件に対して順当な結果とは言えないものであり、《逆接》と分析されるものである。しかし、これらの前件と後件の間に全く《対比》を読み取ることができないかということ、そうではない。(61)の前件は「雨の予報」で、後件は「傘の不携帯」であるから、「満点の成績」と「落第点」のような、直接的な《対比》とは言えない。しかし、前件について「雨の予報」から「傘の携帯(の必要性)」を連想し、推測すれば、「傘の携帯」と「傘の不携帯」という《対比》に解釈できる。(62)も前件から「勝ち上がるだろう」「強い」という内容を引き出すような解釈をしていけば、「勝ち上がらなかった」「弱かった」という後件の内容と《対比》が成立する。(63)は、前件を「仕事のよくない点」と解釈し、後件を「仕事の好ましい点」と解釈すれば、それらは《対比》の関係になっている。つまり、前件と後件をそのまま《対比》するような関係になっているのではなく、そこから推測される内容、関連性理論の用語で言えば、前件から引き出した文脈想定(contextual assumption)が《対比》されているのである。前件と後件が単独で《対比》と解釈できないようなものでも、文脈想定を介して《対比》の関係は成立しているといえる。《対比》に用いられる文脈想定が容易に引き出せる場合ほど、《対比》という解釈は成立しやすい。これに対して、前件だけから単独で引き出しにくい文脈想定で、後件を提示されたから前件を再解釈して引き出すような文脈想定では、《対比》とは理解されにくくなる²⁸。

一方で、次のような例もある。

- 64) 日本史の試験では9割は正解するだけの自信があった。しかし、結局、半分くらいしかできなかった。

²⁸これについては、加藤重広(1999)で提示した「解釈にかかるコストが高いほどその解釈の優先順位は下がる」という考え方と基本的に同じである。

この場合は、前件と後件が「よい出来（という事前の予測）」と「よくない出来（という事後の結果）」という《対比》をなしているが、「自信があること」から予測される結果とは異なっているという点で《逆接》だとも言える。これは、文脈想定を引き出さなくても容易に《対比》され、かつ、《逆接》の関係にもなっているわけである。

以上の検討から、《逆接》と《対比》は排除しあう概念ではないことが分かった。むしろ、《逆接》も広い意味での《対比》であり、前件と後件から引き出される文脈想定への負荷が大きいと、一見、《対比》という解釈が後退するかのように見えるに過ぎないと考えられる。

3.4. 転換

岩澤治美（1985）は、「しかし」に転換の用法があることを指摘している。また、多門靖容（1992）は、「話題変えマーカ」とでも呼ぶべき用法だとし、「しかし」の機能を大きな話題の中での小話題の転換と見ることができると述べている（多門（1992:62））。浜田麻里（1995a）は、「しかし」の転換機能がまったく無関係な話題への転換ではないことを確認した上で、当該のことがらの別の側面が存在することを示して、その異なるカテゴリーに注目させるのがこの種の「しかし」の機能だ、とする。多門（1992）と浜田（1995a）は、大局的に見れば同じ方向の分析だといえるだろう。

「転換」と呼ばれる「しかし」は、たとえば、次のようなものである²⁹。

- 65) 係員 「係長、報告書、直しました。」
係長 「ああ、直ってるね。しかし、相変わらず汚い字だな。」
- 66) ホノルルに飛ぶ前日、京都化野の念仏寺で竿灯供養。そして羽田に行く直前まで句会に出席しているという。これも又、気障りである。でも逆に言うと外国なんぞ行くのが気恥ずかしいということもある。
しかし船旅というのは楽しい。五年ほど前にマトソン・ラインで南太平洋に遊んだことがある。
- 67) 杉浦 「一応、読者を想定して、はい、いつも書いてますけど。」
宮本 「やっぱり。しかし、その「はい」っていうの、やめてくれませんか？」
- 68) 昭和二十年の五月の空襲で、この印刷所は焼けてしまった。しかし、妙にここの職工さんのことが忘れられず、上京した折にこの印刷所をたずねてみた。

これらをどういう根拠で「転換」とするかは難しいところであるが、「しかし」の後件が前

²⁹(65) は本稿筆者による例文。(66) は岩澤（1985）の挙げる例文、(67) は浜田（1995a）の挙げる例文、(68) は、森田良行（1989:511）にある例文である。

件から異なる話題になっていると解釈は可能であろう。また、(65)は、それまで話題にしていなかった「文字の巧拙」に言及しているが、これは「報告書」に書かれてあった文字であるから全く無関係な話題ではない。(66)は、「旅」という、大きな話題があり、そこで初出の「船旅」という小話題に転換していると言えるだろう。(67)は、杉浦なる人物に「はい」を発話中に挿入する癖があり、発話の内容そのものから発話の方法へと、メタ的な側面への話題転換が生じていると浜田(1995a:202)は説明している。つまり、一種の小転換であり、無関係な話題への転換ではないということになる。

しかし、これらは「転換」と見なければ説明不可能かというところではない。(65)は、「内容は問題ないが、字が汚い」という、内容と形式の《対比》と読めるであろう。また、(66)は、「飛行機で外国に行くのは気恥ずかしい」という否定的なことを述べて「しかし」を置き、後件で「船旅は楽しい」と肯定的なことを述べているので、《対比》と分析可能であるし、あるいは前段で「外国旅行は気恥ずかしい」ということから、予想される結果を裏切って「船旅は別だ」という流れになっているので、典型的《逆接》としても問題はない。(67)も、「読者を想定して書いている」と答えたのに対し、発話の趣旨は予想通りであり、受容可能であると述べた後で、ただし相手の発話の方法(話し方)については受容できないという意味の指摘をしているものであり、発話内容と発話方法という《対比》と分析することは可能だろう。(68)も、「焼失した」ら「忘れてしまう」ことがあってもおかしくないと考えれば、《逆接》と分析可能であるが、物理的には「焼失した」ものであっても、記憶の中には残っていて「忘れられず」にいと見れば《対比》の解釈も成立する。

これらの共通した特徴は、それまでに話題にしていない新たな話題が導入されていることである。「しかし」の後件部分は、前件までの発展的内容でも、単純な比較の対象となる類似の情報でもない。たとえば、天候の話の続き(発展)のようなものとは異なるし、同じテストで別の人物が取った点数のようなものではないのである。かといって、全く無関係な話題でもない。この点は、多門(1992)や浜田(1995a)が指摘するとおりである。それまでの会話や文章の流れを断ち切って新たな話題を導入するのではなく、話題の大きな流れからは全く逸脱せずに関連する次の別の話題(メタ的なものも含む)を提示すると見ることができる。この種のものは、《対比》という構造が隠れていて、情報の提示者たる話者(前件と後件の発話者が異なる場合は後件の発話者)が《対比》的な論理関係の存在を知っていたり意図していたりしても、情報の提示を受ける聞き手や読み手にとっては、とりあえず「次の、別の話題の導入」という意味合いのほうが強い。また、《対比》の論理関係を解釈するには、それなりの負担があり、解釈のコストが高い。この場合、《対比》の論理関係を内在させていても、次の話題に移った(つまり、「転換」した)ように見えてしまう。しかし、これはいわば《対比》であることが分かりにくい《対比》なのであり、《対比》という解釈に到達するのに知的処理上のコスト負担

の多い《対比》構造なのだということができる。したがって、「転換」も広義の《対比》の一種だと本稿では考える。

3.5. 無照応と分析される「しかし」

多門 (1992) は、無照応と分析される用法 (照応先とするべき、先行発話のない「しかし、今日も暑いな」など) も同じ「転換」の用法と見ているが、照応先がないのであれば、「転換」とはみなしにくい³⁰。この種の「しかし」が一種の談話標識としての機能を有していることは十分あり得ることである。また、接続の機能、つまり、前件に照応先を置き、後件でそれに対する《対比》などの論理関係を示すはたらきが失われ、後件の提示に関わる語用論的な表示機能を持つ用法が前面に出てきたと考えることにも無理はないだろう。

- 69) 【乳幼児の母親が集まっている席で、話題が途切れしばしの沈黙が生じた後、一人が言う】
「でも、子育てって大変よねえ。」
- 70) 【朝起きて、窓の外を見て、ひとりごとを言う】
「しかし、よく降るなあ。」
- 71) 【その日、友人とはじめて顔を合わせたときの第一声】
「しかし、暑いね、今日も。」

この種の「しかし」あるいは「でも」の後続部分は、話し手にとって既に分かりきっている知識であるのが普通である。つまり、多くの場合、言わずもがなの内容や発話と見ることができるのである。そして、この用法の「しかし」や「でも」は、次のような「でも」の用法と共通性が高い。

- 72) 「この仕事はきつって聞いてたけど、ほんとにきついですよねえ。」「ええ。
しかし、ほんとに疲れますよねえ。家に帰っても、もう寝るだけですよ。」
- 73) 【友人とパソコンショップでケーブルを探しながら】
「どういうわけか、こういうケーブルって、すごく高いんだよ。ええと、ほら。...8000円だって。でも、高いよなあ、ほんとに。」

³⁰ 「さて、それでは、講演会を始めたいと思います」のように、談話の冒頭で言えることから、すべての談話の冒頭部分はそれ以前の部分 (談話の存在しない部分) に対する「転換」なのだと、定義することは不可能ではないだろう (これは、内容ではなく談話がないということを照応先にする、メタ的な「転換」ということになる)。しかし、本稿では、「転換」とは照応先があって、それに対する「転換」と考えたいので、談話の実態的内容を照応先としないものを「転換」とはしないことにする。

これらは、照応先が全く存在しないというものではなく、相手の発話を一応前件と見ることが可能であったり、先行する発話が存在する状況で用いられている。しかし、《逆接》と分析できるものではなく、一見して《対比》という解釈も成立しにくい。むしろ、前件の内容の反復か追認にあたるような内容が後件になっている。(72)は、「仕事がきつい」という前件の内容に対して、後件では「疲れる仕事だ」と受けている。これは、表現は変わっているが、ほとんど同じような意味と言っていいだろう。「きつい仕事が疲れる仕事である」のは当然のことであり、後件部分は言わなくてもいい、わかりきった内容になっている。(73)は、自己内発話に照応先があると見ていいような「でも」である。これは、まず自分で「この種のケーブルは高い」ということを既に発言しているので、事実として値段を確認したあとも認識は変わらず、むしろ知識は証拠によって強化されているくらいである。それにもかかわらず、「でも、高いよなあ」と分かりきったことを発話している。

このような用法で用いられる「しかし」は、「そのことは分かっている。分かっているが、しかし、それでも（やはり）そうなのだ。」という趣旨であり、既に獲得済み、あるいは確定済みの知識に言及していることを示しながら提示する談話標識と見るのが妥当だろう。その結果、「分かりきっていて、言わなくてもいいのだが、言わずにはいられない」という話者の認識が同時に示されることになる。

この種の「しかし」や「でも」は、たとえば、(69)であれば(74)のような認識を提示することになり、(70)であれば(75)のような認識を、(71)であれば(76)のような認識を、それぞれ示すことになるといえる。

- 74) 夏真っ盛りである。従って、暑いのは当然であり、そのことは分かっている。分かっているが、しかし、それでも、やはり、暑いと言わずにはいられない。
- 75) この季節は（あるいは当地は）、雨（あるいは雪）がよく降る季節（あるいは土地）であり、降ることはやむをえないと分かっている。理解してはいるが、しかし、それでも、よく降る雨（あるいは雪）だと、言わずにはいられない。
- 76) 子育てが大変であることは自分の知識や経験から十分すぎるほど分かっており、自分もそのことはすでに理解している。しかし、分かっているが、やはり、子育てとは大変なものだと口に出して言わずにはいられないほどだ。

つまり、これらの「しかし」や「でも」は、ある状況がすでに獲得済みの知識（常識やあるいは常識的判断に属するものも含む）であることについて、後件で同じ内容にあたることをあ

えて言語化する場合に用いられているのである。そして、「分かってはいる。したがって言う必要はないのであるが、それを取えて言語化する」ということを示す談話標識になっているのである。先に 2.3. であげた 6 種類の分類で言えば、「発話の確信度や認識のあり方などを予告する機能を持つもの」に含めることができると思われる。以上の検討から、この種の「しかし」について、以下のようにまとめることができる。

77) 無照応と分析できる「しかし」の談話機能

前件に照応先の存在しない、また、前件そのものが存在しない、無照応の「しかし」「でも」は、 という命題をすでに受容済み・獲得済みの知識として扱い、そのことは分かっているものの取えて' 'という命題を言語化して表現せざるを得ないという話者の認識を表している。

この際、受容済みと扱われる命題 が、実際に聞き手にとっても受容済みであるかどうかは決定的な要因にならない。話し手が、言語化するまでもない分かりきったこととして「でも、子育てって大変よね。」と言った場合、多くは同意を得られるであろうが、「そんなことはない」という反論が不可能というわけではない。あくまで、話者がそういう認識をしているということを示す標識に過ぎない。また、言語化される' 'は、 の部分集合になるような命題か、確実に から引き出しうる命題である。

この種の用法の「しかし」は、すでに受容済み、あるいは、分かりきった内容であることを表すので、後続部分に新規獲得の情報を示すことはできない。

78) 【友人とパソコンショップでケーブルを探しながら】

「こういうケーブルって、いくらぐらいするか、よく分からないんだよ。ええと、あっ、8000円だって。でも、高いなあ、ほんとに。」

この「しかし」は、「そうであることは分かっているが、でも」という意味合いであるから、「しかし」本来のニュアンスは失っていないといえるだろう。3.3. で見たように、「しかし」は反論に用いられると言われてはいるものの、全面的な反論、前件を全否定するような反論には使えない。これは、森田良行(1989:508ff)にもあるように、前件の内容を一応、あるいは部分的に認めた上で申し述べるというのが「しかし」の基本的な機能である。前件を受容した上で、3.1. で分析したような、含意の《修正》を加えるのが通常の「しかし」の機能であろう。この無照応の「しかし」の場合、最初の《前件の受容》についての表示だけが前面に出て、《修正》の機能はなくなり、「受容済みであることをあえて言語化する」という意味をあらかじめ³¹伝

えるだけの談話標識になったと考えることができる。

4. まとめ

「しかし」の基本機能は、《前件を受容》した上で《後件を追加提示》するということであると思われる。多くの場合、後件を追加することで、《対比》が発生する。同一事態を《対比》する場合は、基本的に後件によって前件に対して解釈の修正を加えるのが主たる機能となる。後件に新規の別の話題を導入することで《対比》になる場合は、《対比》という解釈がなされにくく、一般に「転換」と見ていいような関係になる。しかし、これは解釈のコストの高い《対比》であると考えられ、広い意味の対比の一種である。また、「しかし」は一般に「逆接」と分析されてきたが、これも広義の《対比》の一種と見ることができる。「逆接」と分析されるものは、照応先となる前件から引き出される文脈想定（あるいは、ナイーブに「推論」という言い方をすることもできるだろう）に対する解釈の修正を、後件を提示することで行う「しかし」であり、前件と後件が予測・前提状況と結果という関係になっていることが多い。

また、前件が存在せず、照応先を持たない無照応の「しかし」が、談話の冒頭などで見られることがあるが、これは、《前件を受容》したことのみが特化した談話標識であり、「既に獲得済みの知識を分かりきったことと知りつつ言う」といったニュアンスを伝えることになる。

参考文献*

- 浜田麻里 (1995a) 「トコロガとシカシ：逆接接続語と談話の類型」『世界の日本語教育』5 国際交流基金 pp.193-207
- (1995b) 「トコロガとシカシ・デモなど 逆接接続詞の談話における機能」宮島達夫・仁田義雄 (編) (1995) pp.584-592
- 橋本進吉 (1935) 『新文典 別記 上級用』 富山房
- (1969) 『助詞・助動詞の研究 (橋本進吉博士著作集第8冊)』 岩波書店
- 橋本四郎 (1967) 「接続助詞と接続詞」『講座日本語文法3 品詞各論』 明治書院 pp.163-77
- 亀井孝ほか (編) (1996) 『言語学大辞典第6巻 術語編』 亀井孝・河野六郎・千野栄一編三省堂
- 加藤重広 (1999) 「日本語の修飾構造と品詞体系」 東京大学大学院人文社会科学研究所博士課程学位論文
- 北野浩章 (1989) 「「しかし」と「ところが」 逆接系接続詞に関する一考察」『言語学研究』8 京都大学 pp.39-52
- 小池清治 (1997) 『現代日本文法入門』 筑摩書房 (ちくま学芸文庫)
- 甲田直美 (1994) 「情報把握から見た日本語の接続詞」『日本語学』13-10 明治書院 pp.97-107
- 国語学会 (編) (1980) 『国語学大辞典』 東京堂出版
- 岩澤治美 (1985) 「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』56, pp.39-50

³¹ 「しかし、暑いなあ。」は、「暑いな、しかし。」とすることも可能であるから、「あらかじめ」提示するというのが無標であるということに過ぎず、予告機能に限定されるわけではない。

*アルファベット順の配置

- L'Huillier, Monique (1999) *Advanced French Grammar*, Cambridge / New York / Melbourne : Cambridge University Press
- 前田直子 (1991) 「論理文の体系性」『日文学報』10 大阪大学 pp.29-42
- (1993) 「逆接条件文「～テモ」をめぐる」益岡隆志 (編) (1993) pp.149-167
- 益岡隆志 (編) (1993) 『日本語の条件表現』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992²) 『基礎日本語文法 - 改訂版 -』くろしお出版
- 松村明 (編) (1971) 『日本文法事典』 明治書院
- 松下大三郎 (1930a) 『改撰標準日本語文法』 紀元社 (勉誠社復刊本 (1974, 19782) を参照)
- (1930b) 『増補校訂標準日本語文法』 紀元社 (勉誠社復刊本 (1977) を参照)
- 宮島達夫・仁田義雄 (編) (1995) 『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』くろしお出版
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店
- 湊吉正 (1968) 「接続詞の境界」『月刊文法』1-1 明治書院 pp.96-103
- 永野賢 (1958) 『学校文法概説』 朝倉書店
- 永山勇 (1968) 「接続詞の誕生と発達」『月刊文法』1-1 明治書院 pp.19-27
- 中右実 (編) (1998) 『日英語比較選書3 モダリティと発話行為』 赤塚紀子・坪本篤朗 研究社出版
- 仁田義雄 (編) (1995) 『複文の研究 (上)』くろしお出版
- 大槻文彦 (1889) 『言海』 富山房 (参看したのは、大空社復刻版, 1998)
- 佐治圭三 (1970) 「接続詞の分類」『月刊文法』2-12, 明治書院, pp.28-39 (佐治 (1991) にも再録)
- (1987) 「文章中の接続語の機能」山口明穂 (編) (1987) pp.127-154
- (1991) 『日本語の文法の研究』 ひつじ書房
- 阪倉篤義 (1986²) 『改稿 日本文法の話 (第二版)』 教育出版
- 佐藤孝 (1968) 「接続詞ははたして必要か」『月刊文法』1-1 明治書院 pp.104-110
- Schiffrin, Deborah (1997) *Discourse Makers* (Studies in Interactional Sociolinguistics 5) Cambridge/ New York/Melbourne : Cambridge University Press
- 白川博之 (1995) 「理由を表さない「カラ」」仁田義雄 (編) (1995) pp.189-219
- 多門靖容 (1992) 「文章の談話分析 「しかし」前後件の後続展開調査」『日本語学』11-4 明治書院 pp.56-62
- 田中章夫 (1984) 「接続詞の諸問題 —— その成立と機能」『研究資料日本文法 修飾句独立句編』 明治書院 pp.81-123
- 時枝誠記 (1941) 『国語学原論』 岩波書店
- (1950) 『日本文法 口語篇』 岩波書店
- 坪本篤朗 (1998) 「文連結の形と意味と語用論」中右実編 (1998) pp.99-193
- 塚原鉄雄 (1968) 「接続詞 その機能の特殊性」『月刊文法』1-1 明治書院 pp.10-18
- (1969) 「連接の論理 —— 接続詞と接続助詞」『月刊文法』2-2 明治書院 pp.68-74
- Verschieren, Jef (1999) *Understanding Pragmatics*, London : Arnold
- 渡部学 (1990) 「2文の因果関係と接続」『日文学報』9 大阪大学 pp.51-67
- (1995a) 「ケレドモ類とシカシ類 - 逆接の接続助詞と接続詞 -」宮島達夫・仁田義雄 (編) (1995) pp.593-599
- (1995b) 「ケド類とノニ - 逆接の接続助詞」宮島達夫・仁田義雄 (編) (1995) pp.557-564
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』 宝文館
- 山口明穂 (編) (1987) 『国文法講座6 時代と文法 - 現代語』 明治書院
- 横林宙世・下村彰子 (1988) 『接続の表現 (外国人のための日本語例文・問題シリーズ6)』 荒竹出版